

大塚保治

夏目君と大学



夏目君と大学（談）



明治三十六年一月末、夏目君は英国留学から帰朝し、その春から東京帝国大学講師及び第一高等学校講師として帝大及び一高へ夫々それぞれ出ることとなった。元来夏目君の英国留学は恐らく留学前まで勤めていた熊本高等学校教授の資格で行ったのであるから、順序から云えば帰朝後は熊本高等学校へ勤めるのが本当であるが、当時夏目君は余り熊本へ行くことを欲しなかったし、それに親友の狩野亨吉氏がその時一高の校長であり、又、菅虎雄氏も

一高の教授であつた関係上、狩野氏菅氏などの尽力で一高へ出ることとなり、尚帝大へは当時の文科大学の学長坪井氏へ私が推薦したことなどで出ることとなつたのである。

当時帝大では小泉八雲氏のラフカジオ・ハーン氏が辞任し、その後へ上田敏氏、ロイド氏などと共に夏目君が入つたのであるが、夏目君たちが入るためにハーン氏をやめさせたのだなぞと取沙汰するものもあつたが、そんな事は決してなかつたと信ずる。ハーン氏は都合により円満に辞任したので、しばらく後任者がなく、その後任

として夏目君などが入ったので、前々から夏目君などを入れる予定があつたわけではなく、従つて夏目君などを入れるためにハーン氏をやめさしたというような事情は全然なかつたのである。当時の帝大の同僚中夏目君と懇意な人としてはドイツ文学講師の藤代禎輔氏、私などであつた。

夏目君の大学に於ける講義は、最初の二年間は今『文学論』として出版されているものであつたが、非常に評判がよかつたように思う。又、後その講義を整理して『文学論』として出した際、私も一本を寄贈されたが、それ

を読んで新聞紙上にその印象を書いたところ、それを見た夏目君からありがたいと感謝した手紙を貰ったこともある。尚当時夏目君は千駄木町に住んでいたもので、私も屢々千駄木町の御宅に訪ねて行ったが、その時分夏目君はひどい大神経衰弱の絶頂で、いかにも苦るしそうであった。私は神経衰弱のことはよくも知らなかったもので、どうも夏目君も近頃少し変だな位に思ったのであるが、後私も神経衰弱に罹っているいろい苦痛を嘗める様になって、当時の夏目君に大いに同情するに至ったのである。

夏目君が大学をやめたのは、朝日新聞社へ入るため



あつたと思うが、当時私は夏目君に教授になって、大学のために尽くして貰いたいと思つて、夏目君にもそんな話をしたのであつたが、その時分夏目君はすでに『吾輩は猫である』や『坊つちゃん』や『草枕』等を書いて創作方面にも進んでいたので、教授になつたからと云つて創作をやめるといふことは承服しないだらうと思ひ、当分創作と教授と両天秤でやつて貰いたいと思つたが、それには大学当局の承認と夏目君の承諾を得なければならぬと考へて、先ず大学当局へその話をしたのであつた。当時大学総長は浜尾氏であつたが、いろいろ考慮すると

のことで中々急には進捗せず、大分たつてからようやくそれではということになったので、急いで夏目君のところへ行ってその具体的な話をしたところ、すでに晩く夏目君は朝日入社に決定してしまつたあつた。尤も夏目君の新聞社へ入るといふことは前々から聞いていたが、そう急には運ばないだらうと思つていたのに、すでにきまつてしまつたと聞いて少し失望したようなわけである。併ししか乍らなが創作と教授と一人の力を両天秤に使うことは、結局両方共不十分な結果をもたらし、双方に不満足を与えるようになるので、夏目君が創作一方に努力す

るために大学をやめたのも止むを得ない至当なことだとあきらめ、夏目君の精進を祈ったような次第である。

（『漱石全集』（昭和三年版）月報第九号（昭和三年十一月））



日本文学電子図書館

---

夏目君と大学

著 者：大塚保治

制作者：宮澤一郎

底 本：「漱石追想」

岩波文庫、岩波書店

2016年3月25日 第1刷発行

---

日本文学電子図書館